

秋晴れの国立競技場で

大月 和彦

秋晴れの10月21日の国立競技場。息子の押す車いすでJ1リーグの首位を争うヴィッセル神戸vs鹿島アントラーズ戦を観に行った。

東京オリンピックのメイン会場として建て替えられた競技場は初めて。大江戸線「国立競技場前」から地上に出ると中央口。

神戸のチームカラーのエンジ色のシャツを着た若者と家族連ればかり。

キックオフは2時。長い列が続く。警備スタッフが声をからして誘導している。車いすの席はバックスタンド1階の中ほどにある特等席。同伴者席もあり一緒に観戦できる。ゲートを通るとまぶしく光る空間が見えてくる。陸上競技場は区切られてサッカー場

に。

ドーンドーンと太鼓の音と歓声が地鳴りのように響いている。両サイドのスタンドに陣取ったサポーターは赤一色。試合が始まる前から太鼓を打ち鳴らし、大きな声で氣勢を上げている。ヴィッセルの応援団は神戸から夜行バスで来ているという。

7万人収容という3層のスタンドは、ほぼ埋め尽くされていた。座席の上を覆う屋根の縁が空を楕円形に切り取っている。

2時近く、両チームの選手が一人ずつ紹介されて入場する。ピッチに仕掛けられた装置から白煙と炎が吹き上がる派手な演出が続いた。試合が始まる。シュートやゴールが決まりそうになると、サポーターは一斉に立ち上り、腕を組み屈伸をくりかえす、熱狂的な応援をくり返す。

前半戦だけ見て競技場を後にする。5万人余の大観衆、熱狂的なサポーター、ぶつかり合う選手たちが発する熱気に中（あた）ってしまった。

当日の朝日新聞の声欄に101歳の僧職の「雨の壮行会、特攻隊員の別れ」が載った。80年前のこの日、この競技場で行われた出陣学徒壮行会を回想して「徴兵猶予がなくなり、学業を中断して戦地に行くことになった学生たち。東條首相の訓示と閲兵があり、小銃を担いずぶ濡れになって行進した。スタンドを埋めて手を振る白いブラウスの女子学生たち…」とあった。